

現代陶芸の未来考察

きょうまで 笠間で東洋陶磁学会

東洋陶磁学会の第41回大会が19日、笠間市笠間の県陶芸美術館で始まった。「現代陶芸の形成と理論・産業と表現」を総合テーマとして、初日は美術館学芸員らが研究成果を発表。参加者は現代陶芸の形成から現状、未来までについて考察した。同大会の県内開催は初めてで、20日までの2日間にわたり、多彩な発表が行われる。

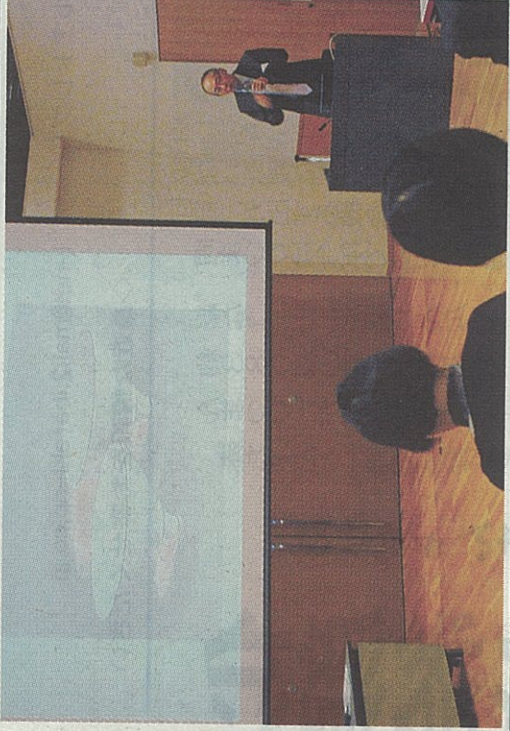
同学会は1973年、東洋陶磁の鑑賞と研究を目的に設立され、現在の会員数は作家や研究者、愛好者など全国で約650人。大橋康二常任委員長は大会冒頭、「今、日本

の陶磁産業は不況。そのうちした陶芸の未来を考える場になれば」とあいさつした。陶芸評論家の金子賢治同館長が基調講演。近代陶芸が持つ「用と美という産業の工芸

観」や50年代ごろにオアシエが登場する陶芸史などを説明した上で、現代陶芸の制作について「素材と格闘しながら、可能と不可能のはさまで(表現を)探り取っている」などと話した。このほか、愛知県陶磁美術館の大長智弘学芸員がアジアの現代陶芸の現状をス

ライドを使って紹介するなど、多彩な研究発

表が行われた。20日は午前10時15分から夕方まで、美術館学芸員や本県陶芸家などの研究発表が行われる予定。当日参加も可能で、参加費は2000円。問い合わせは同館 ☎0296(70)0011。(三次豪)



多彩な研究発表が行われている東洋陶磁学会第41回大会―笠間市笠間

2013 県芸術祭

能楽と川柳披露

県芸術祭(県、茨城文化団体連合、茨城新聞社など主催)は19日、能楽大会が牛久市柏田町の市中央生涯学習センターで、川柳大会が高萩市春日町の市総合福祉センターで、それぞれ開かれた。

舞や謡、堂々と

◇能楽大会

県能楽連盟(井上和子代表)に加盟する能楽愛好者が参加。子どもからベテランまで、幅広い世代が伝統的な仕舞や連吟などを堂々と披露した。

大会は昨年に続き「21世紀を担う子どもたちと共に」を掲げ開催。桜川市磯部地区を舞台にした世阿弥の謡